



Title	社会誌学
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1965
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77365">http://hdl.handle.net/2115/77365</a>
Type	manuscript
Note	社会誌学講義東洋大学社会学部
File Information	N036_01S40.pdf



[Instructions for use](#)

学七捕芳の付

川島市役所

3-

探

記

未

明

時

NOTE BOOK

Manufactured with best ruled foolscap

社会学誌  
昭和四十年度

VOL.

社会学部講義

鈴木教授

OX  
30



日本の社会学者の現時における考察は何れ  
の方面に属するものも、今既に進行して来  
る急激にして大規模の国民生活における社会  
変化を意外視することは出来ぬ。

社会変化は日本の国民的生活の体質  
の急激な変遷を意味してゐる。この社会  
変化は果敢的に何を意味するか。その点を  
明かにするが本稿の主旨である。

この社会変化は異文化的に国民生活の外  
挿の概念であつて、物質の出入、文化の出入、  
他人の出入に包む別段かとれるべきである。  
体質の急激な近代化の社会体質が、



日本の家族と中口の家族 (少指家族)

日本の家族は死ねば法共式。ステ子の侍と中口のどんぶり教し。更家若狭家族は中口の事。

日本の家族の欠点とは結婚の位者。不降さる。

体質共同性は家同族の教訓。教養の高さ。他人の仲介が他人の事であつた。おれんじ。

かおれは寺の魂はり。結婚は他人の事。

家と一代の例もある。

家中心の家族 (の家で)。猫はすんは家中。心よしくのちやうければ本家のゆけはかたじけなく。

ヤイトマキ。と高貴末の漢光の心か。一家心中。

と実実な人同の心は重なりなへい。

東京の市内道路が最近か俄かに整備し立派

な家庭が出来るのは東京生活の最近の事情とし

て明瞭な。日本中どのところでも日本は

何と云わんぞうつに。外観におけこの

変化によつて。日本中の現在の家々方は

社会をなすには何と評さるるか。

社会をなすは介りの口事の変化の中心的

変化として。後の物なすのをよみとつて。

一) 家族制より直系家族より夫婦家族へ

二) 村落制より行政村へ

三) 常態村型へ

四) 家族制より完全村落へ

五) 社会的交流現象の圏の拡大時代の経路

凡人が人を愛するの起るは老人病  
の一種の叫びか見れば火傷明か事  
がいろいろある

父の死に送金してクルルジャンの名

今日日本人の心の割りと切ります心は子に親由に愛の多いが

親夫妻、子夫妻同族の家族のイタリイタリ

最近の統計では日本の高令女性とポーランドの高令女性  
がどのくらいか多量か多い。自殺の多量は高令女性  
が多い。

家族制の衰退の足帯は今更にとり道にはおまぬか、せめて  
二十年ばかり経てば思ふより我制をいうつり得る  
中日の例は否かある。

毎年断絶する其の光輝 子は公共の福祉にある  
昔多國の家族。其に夫婦はオスとなすの關係  
我家族制の衰退の程

平和を望むるもの人同輩の内に

一般を言つて祝福の中に子は生れ、一家の世にその中に老人が

ぬるが、それが理想であらうはあつてあり。老いた病弱の老人

と幼少の子供が大事にされる家族をいかに健全な家族とした。

日本のこのロクローシーは家共同族の内に形成されていく。

マクスウェルは日本の資本主義経営の技術はヨーロッパに

学んだことを、この家が、家に名譽しし子を言ふ事をする

まじしは日本人の人心を、その親は自らかう親の徳を

この功よりま家族制をこうするに様式組織にするべき

この功よりま家族制をこうするに様式組織にするべき

實質的社會の知能は現在と足下の社會  
意味の世の轉鎖

社會の足下に國民の知的自己保存  
一般大衆は感情の對を抗争

絶戦を好米口の指導を去るため。

才三回

前回の宗族制の变化は口良の社会、体質の  
最深处に於ける変化である。その力記したが、

この良は如何なる網に於ておすかはな  
い。宗族制の神祕成性の中  
であるが、前回は結核病の音響の力に力  
を注ぐす。日本人は命をかける愛をもち

い。日本人は幸福を愛し、それが人生の幸福  
である。それ故に、我々はかくなり日本人は虚  
偽の

一般の人には虚偽の要素の同じくはた  
たのち大か大回してあつた。それは外に  
あつた。

日本人の宗族制は法典で成つた。その  
大なる特徴のすなわち、中門の格と父権的宗







※ 口々に又人数の増える会をなす人が多くなる

この間は物は大事にすゝめたい

このころからこの頃はのち

また今の乱費を止りませう消費革命の  
ためめ暇の子にけよくな、困窮が少い、

いゝのちり別れぬ。 ※

日本の直子家庭の時代は家族は一つの

生活共同体としてそのふにけう（晴よく働

いと共し、一家の繁栄を、生活共同

体が大規模である場合は、自から合

理的な統率的なピラミッドの組織

機を作り出し、島根の若田村

の夕方の祝祭の宴の役場組織。スリム

な、この日本は管束を新たに、



村落の近代化がその主軸的変化する。第二回

身代の近代化に同進する理論

(一) 村落の近代化 (個人主義の自由と金銭)

1. 清中村 2. 組合村 3. 農場村

(二) 都市化の推移 (都市計画の推移と)

1. 都市化の推移 (都市計画の推移と) 2. 都市化の推移 (都市計画の推移と)

3. 合理化の過程

昭和三十一年 昭和三十一年

(三) 成員の移動 (二つの型) 1. 都市化の推移 (近代化の推移) 2. 都市化の推移 (近代化の推移)

2. 都市化の推移 (近代化の推移) 3. 都市化の推移 (近代化の推移)

(四) 交流の増大と交流の増大 (昭和三十一年)

村落 (最近) における (昭和三十一年)

(五) 行政組織の基礎 (昭和三十一年)

昭和三十一年

地方

二、七日本口民を体質的に変化してあるものがある。

昭和三十一年

村落の近代化は、個人主義の自由と金銭の近代化

以外にない。

都市化には、次の三つの変化過程がある。

昭和三十一年

1. 農村化 (結核の増加)

(集約的機関)の増大の過程

2. 都市化 (農村化)の増加

の過程 (昭和三十一年)

3. 村落 (最近) における (昭和三十一年)

増加の過程

課題共同の持続、意味共同の目的的發展  
未偉出の強と弱の秩序は自然村の場合  
成員の更新の原理

都市近郊社会の場合には近代化し

地或る、選挙、期了、多  
議決、理花の都市の思、いから集  
団活動の空型は五九、二水は  
正に近代型

近代化型は代表者は一戸又は数戸  
に團定（者屋カヤヤ一神祀に向）  
富集の道徳の坐席。  
ケネソーの予孫への衆人の誓、可

一、共同の洗的、都市の元分構造

二、落着き村型へ常緑村型へ

人に更新の二つの型  
（選挙権を我、民に能くする）

三、選挙権を我、民に能くする  
多額決、選挙権、多額制

都市と農村の別は一方向  
村集義理人情の場、未決層の人回向  
の強と弱の秩序

都市はその外に決着される場  
力同化、カレレの主要関係の場  
都市化か近代化とあるか

力同化、カレレの主要関係の場  
都市化か近代化とあるか

旧戸と新戸の別あるところとなつて来り。

日本に於て都市生活は合衆化して来り、  
即ち近代化して来り、農村は未だ未だ

近代化の途程、  
その可なり、近代化して来り。

近代化の途程、  
その可なり、近代化して来り。

都市化は近代化を意味す。

然し何時か、  
都市化は近代化を意味す

その可なり、  
日本に於てのものが近代

化して来り、  
都市化は農業の

機關の増大を意味す、  
又は行政上の

取柄が、  
都市化の途程、

我が口では、  
個人主義、自由主義

化民を、  
近代化による合衆化が、  
農村は未だ未だ

その可なり、  
それを身に付けよう、  
現在

都市化が近代化と同義になつて来り、  
日本に於て

社会学的的の的解  
社会的空間の概念は便利  
な凡て工業的的的的解

才三回(六月十日)

文化成吉思上<sup>二</sup>現在日本の急変化を考へる。

二此種書はするはな<sup>二</sup>然し今それを考へる<sup>二</sup>はな<sup>二</sup>。

正倉院の文物と母島の古代の文物。

王朝時代の文物、武蔵の百姫

輕<sup>二</sup>より紙形<sup>二</sup>あるの武蔵の文化決<sup>二</sup>とい<sup>二</sup>く<sup>二</sup>の<sup>二</sup>はな<sup>二</sup>。

百姫の生活はいつれも悲劇<sup>二</sup>であらう。

明治以降の日本の発展と百姫の真実。

紙形<sup>二</sup>の<sup>二</sup>口<sup>二</sup>学の<sup>二</sup>発展<sup>二</sup>を<sup>二</sup>論<sup>二</sup>いた<sup>二</sup>の<sup>二</sup>水

田清日<sup>二</sup>の<sup>二</sup>我<sup>二</sup>考<sup>二</sup>を<sup>二</sup>な<sup>二</sup>し<sup>二</sup>て<sup>二</sup>け<sup>二</sup>た<sup>二</sup>の<sup>二</sup>水

地<sup>二</sup>理<sup>二</sup>が<sup>二</sup>た<sup>二</sup>の<sup>二</sup>時<sup>二</sup>源<sup>二</sup>、<sup>二</sup>そ<sup>二</sup>の<sup>二</sup>上<sup>二</sup>血<sup>二</sup>物<sup>二</sup>本<sup>二</sup>の<sup>二</sup>

も<sup>二</sup>あ<sup>二</sup>る<sup>二</sup>。

口<sup>二</sup>は<sup>二</sup>統<sup>二</sup>治<sup>二</sup>し<sup>二</sup>て<sup>二</sup>あ<sup>二</sup>る<sup>二</sup>は<sup>二</sup>百<sup>二</sup>姫<sup>二</sup>流<sup>二</sup>の<sup>二</sup>

自然村が存続する限りその根深い傳統と昔の口家の財産としての百姓の村はいつまでも存続するであろう

政治がその上におおさつした農家

が清くたす、それが農村の精華

化であり、近代化である。

経済も存す、この方向に向つた努力が

か向つたのは九州の先下戦時ま

古の農村の本へあつた。

幾の荒地改革も町村合併も最近の

高層経済成長が俄かに物知物知

就降の子晴か開けたと共に都市化

近代化か近頃の事である。

自然村が解体し所の限り政治の感

いしのとりの百姓の傳統は改変するは存続

維持するにしようとするは人の口民

道とあるのみか大所分。

今の大変化はそんな意味の百姓が

なくなり農業企業化してこの農地

が整理したる、百姓も住いめつ比年平年の口民と

の甚新な生済が農村に広がる

事である。今こそ土地の生業に

物事のそれぬおし、口民生活作

かほつたるが大変化である。\*

そのおのほ地域統治組織を拡大

すよ、かゆあせである。

境界の拡大は政治の成長を意味し、

生活圏の拡大はそれの伴うものである。

とあり得る。若しは、百姓も住いめつの農業企業化



行政圏の拡大は其の場合毎日の民  
には大変化を感ぜざるものかも知ら  
ぬ。

行政圏は最終には国境の  
境線の上にある。やがて世界の  
家への前進を望みすより若くは  
。口民社会の交流地帯の物的理解。  
政治家の醜態は清浄なるもの  
す。口拡大はついに行くのである  
。

人間地域共同の基礎

対川の共地、長官の上流の拓の中の  
アレーラ

生活圏が自然に拡大し政治圏がその  
に伴って広がる。務めある。

社会生活前進の速なる方向を  
示すは政治である。正しく政治家  
の出現は期はるべきである。

社会生活の発展は何かには  
人間共同の型の発展とある。

人間の型の発展には社会生活  
の発展は伴うのである。

却覚と村野の呪術

地而立據の世に龍舌の共同期にはある

正清、正清、村野、村野

一方別の洞窟の中の人

一口及島一物に交授

万人が万人を敵とした時代

山の生活すゝ山の神の信仰

おしほをすゝれぬ

交際圏の拡大と連年の増大

現象の制的理解による口良

礼子の適適及。これが礼子の

の漢字の交流現象は今も村野此

最終回(六、一七)

常盤は都立比により、近代化した、あは

他人を死に、自由を死に、合理化して

あ。道路ハスチマスコエ、生産者の地方化、教育

都市も古い網法りの七島職の解体

は大土運業より。我口二層、親夫婦子夫婦

レキヤ一の公認は大製業(工業者めや

親妻企業家の増進による、(急来)

に流行した。茶室孝存記者の振道

マーケ、新ソリの前道り消費費

后で、(サシカシ) 蓄力のテリ、いりもなく上下

同好もなくたつ、口良の良此の

多道。厚翼の新採用におけ。

秋夫婦子夫婦別世帯  
あり、また同一世帯に  
あり、また同一世帯に  
あり、また同一世帯に  
あり、また同一世帯に

時代の秩序の問題。

労組、総評による被支配者群の生活向上の運動

北米関係の近代化の意味

長らく固定した共同経済の中心に在りて  
決着の國情や階級的意識を放棄して  
現在の人の力や徳性からして人の能力  
的地位や役割を定めては人に才を奪  
奪し集約活動の中心は進歩的  
多量生産の方法を用いて他人を排  
自由主義をせしめては進歩的  
主義によりは進歩的

復興の任期つき進出と  
後者の多数決決定が主である。

これは近代化の中心は  
構成員の存在である。自由経済の  
自由経済の中心は  
自由経済の中心は

は別である。日本は  
菊造りの世界

縁故関係の比率

ある政党の親分の関係  
上層における関係、下層における

党閥、学閥、派閥、利権、縁

アムハイト部とフンケイの友

我々の時世

① 知りの時代、家庭電化、消費革命

②

何れも大企業家の

テレビ、ラジオ、週刊紙、旅行ブーム、出版

右は何れも都市の大企業家の子弟

展の為、交通、水回、電化、無線、発展

の時代から大規模な建設、遊園地、娯楽場

ポロト、園地

昭和十年頃の豊田三男の職場が  
心配であった。分家慣習あり

今では主人は出稼、長男は都心に  
就職、おにほ三ヶヶヶの

家は長男を打てる男と拘束力を  
もつてゐる。自由主義的  
子供の結婚に對して決定力がある。

家産と林蔭(夏蔭)は直

接の生活の場、そこでの人の生き

は、今僕が成長して、あつた。

気が引ける心をすすめよ。

大らかにで

づいぐ、物をまわ

自己をもち  
こたわらない

大市町の経営者発展のゆゑに成長大なる

ある結婚式、法務の命令、同定多生

交通機関(列車)電車、バス、汽船、

ホテル温泉)を中心とした了業、

土地建物の販売、家を電化、電話、  
電力大企業株の接近力による。

労働基準法

人権保障法、労働法、判決  
最低賃金制、小中学校教育

組合、法務  
各種の政令、マスコミ

他人主権、自由主義、合理的主義の急前進、

古い階級的秩序の消滅、現在本位、生活  
全体の世の中

社会関係における近代化、協力組織のあけ

近代化は欧米文化の方向が最上、博覧強  
愛は自分より大いなる他人主義の当然のもの

皇位や人生や信仰に芸術に對する時は  
いふは日本は優柔と思ふ。ハラスモ  
ズク物もある少年の聲は近代の理想の  
それを伺ひて居るとう抗議は前代代的な  
階級の秩序や料利定心の引つぱら  
れよかうてあよ。

現地の根拠

村落分類理論 (農村原理)

都市化の理論 (都市即ヨーロッパ化の論)

都市化理論 (日本の都市化理論) 増補都市研究

成員変形型二類 (前近代より近代へ)

口民研究 社会学

行政学 社会学 口民研究